

# 学生の辞書利用の実態についての小調査 6

## —外来語とスマートフォン—

A Survey of Students' Dictionary Use 6

Misa Otsuka

大塚みさ

日本語コミュニケーション学科教授

### 抄録：

近年、大学生の日本語力の低下が指摘されている。日本語力を支える語彙力の養成が必須であることは言うまでもないが、自在に使いこなせる使用語彙をいかに増強するかが課題である。一方で国語辞書離れも進んでいるが、スマートフォンを介したオンライン辞書の可能性に期待することはできないだろうか。本稿では学生たちの意味の分からない語への対処と辞書情報の活用について実態調査を行い、その可能性を探る。

### Abstract：

Vocabulary building is necessary. Japanese college students should develop their vocabulary in use because it is directly linked to the proficiency in the Japanese Language. Unfortunately it has been noted that the proficiency of Japanese college students in the mother tongue is decreasing. The paper will explore how students deal with unknown words and how dictionaries provide useful information by conducting several surveys. Although less and less people use paper dictionaries or portable electrical dictionaries these days, we may be able to expect the possibilities of online dictionaries accessed via smartphones. They can use such dictionaries more effectively after a certain amount of instructions.

キーワード：日本語力、語彙力、辞書、オンライン辞書、スマートフォン

**Keywords**：Language proficiency, Vocabulary, Dictionary, Online-Dictionary, Smartphone

## 1. はじめに

大学生の日本語力の低下がしばしば指摘される。特に語彙力が話題になることが多いのは、それが日本語力の礎を成すという考えに基づくものであろう。

大学生の日本語力については、しばしばリメディアル教育との関連で述べられる。小野ら(2012: 144-147)は初等・中等教育までの「国語科」で学ぶ言語力と、大学生が習得すべき「日本語力」とを明確に区別し、後者を初等・中等教育での国語力の上に、大学でのさまざまな学びや社会人として必要となる理解力、論理力、論述力などの思考力、さらに自分の人生を組み立てるための創造力や問題解決力などを支えるための力を指すものと述べている。また高等教育において母語である日本語を十分に使える力とは、思考を支える道具としての言語力であると指摘した上で、その測定が困難であると同時にその成果も一朝一夕にして得られるものではないと述べている。測定については、NTT 語彙推定テストを用いて語彙量を推定した松浦(2015)、調査用国語辞書に使用語と理解語の印をつけさせる内省法による調査を実施した萩原(2016)、そして語彙サイズテストを開発して実施した田島ら(2016)の研究成果が報告されている。

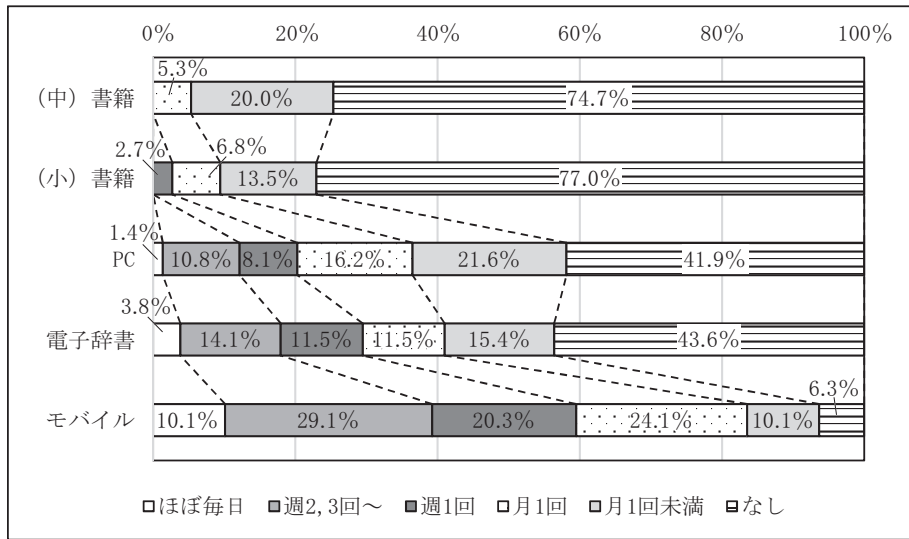
大学生の日本語力の低下が指摘される中、彼らが自ら辞書を引いて語彙力の向上を図ることは現実的だろうか。筆者は、これまでに学生の辞書利用に関する意識調査を数年おきに行ってきた<sup>1</sup>。書籍辞書の販売部数は下落の一途をたどり<sup>2</sup>、いわゆる電子辞書についても2012年から2016年にかけて国内向けの販売台数を65%に減じている現状である。これらに代わって辞書機能の一端を担いつつあるのは言うまでもなくスマートフォンであるが、彼らが常に携帯するこの端末は語彙力の養成に貢献しうるのだろうか。

本稿ではこの可能性を探るための予備調査結果の考察を通して、今後の研究への指針を探ることとする。

## 2. 学生の辞書利用に関する意識調査

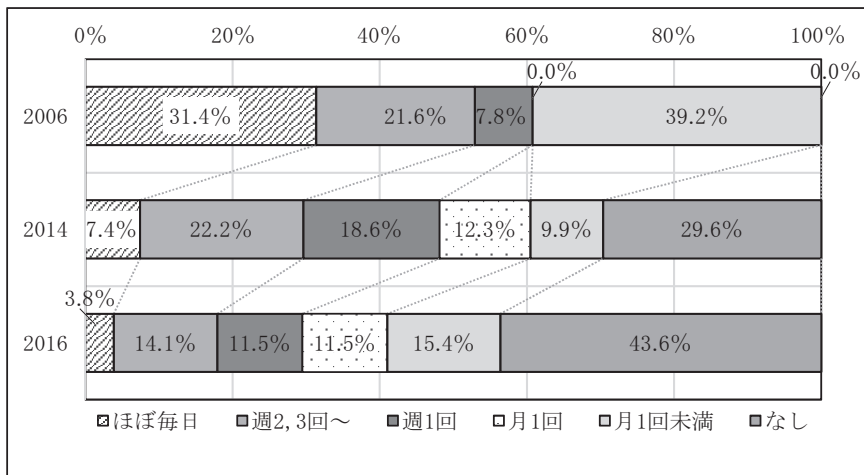
筆者は、これまでに学生の辞書利用に関する意識調査を数回行い、電子辞書や携帯電話の影響を調査してきた。以下に、2015年度に実施した媒体別辞書使用状況の変化を比較した図を示す。これは1年次12～1月の時点で入学後の国語辞書使用頻度を調査した結果<sup>3</sup>である。なお、「(中)書籍」は『広辞苑』『大辞林』等収録語数20万語以上の中型国語辞典<sup>4</sup>を、「(小)書籍」は『新選国語辞典』『三省堂国語辞典』等5～8万語程度の小型国語辞典を指す。また、「モバイル」はスマートフォンや携帯電話、タブレットの総称として用いている。

図 2-1 媒体別辞書使用頻度調査



書籍辞書を入学以来全く使用していないという回答が70%以上に達している。一方、電子辞書は全体の25%が週に1回以上使用しているが、過去の調査結果と比較するとこれも低下傾向にあることがわかる<sup>5</sup>。

図 2-2 電子辞書使用頻度調査の経年変化



2006年時点では全体の60%以上が週1回以上使用していたが、10年後の2016年には半減している。また2006年には見られなかった「使用なし」が全体の3分の1を占めるようになった。

かつては漢字の字形を調べることも国語辞典の主要な使用目的であったが、携帯電話の普及とともにその漢字変換機能で代用されるようになった。その結果ことばの意味を調べるのが国語辞典の主たる使用目的となったが、2010年代前半のスマートフォンの急激な普及<sup>6</sup>に伴い、漢字の字形からことばの意味まですべてがスマートフォンにゆだねられる傾向が認められる。図2-1はこれを如実に表していると言えよう。

2012年度の調査（大塚 2013）では辞書アプリをダウンロードして使用するという回答が「プリインストール辞書」と同じく 23.0%を占めたが、3年後の調査（大塚 2016）では両者を合わせても 25.7%に留まり、その減少分は「ネットにアクセスして使う辞書」の 74.4%に吸収されている。具体的な使用方法として〈コトバンク〉や〈Weblio〉等の横断検索型サイトをあげる回答がある中で、「Google 検索」という回答も見られたが、その具体的な方法や結果を追究するには至らなかった。そこで、改めてこの点について調査した結果を以下に報告する。

### 3. 意味の分からない外来語への対処

学生が辞書を参照するのは、意味の分からない言葉（以下「未知語」）に遭遇したときである。その一例として、外来語の未知語を調べる場面を考察してみることにする。

外来語をテーマとした授業で実施したアンケート調査の結果、外来語の未知語に遭遇した場合にスマホやタブレットで調べるという回答は 78 名中 75 名（96.2%）に上る。具体的な調査手段については、以下の選択肢を設けて回答させた。

- 1 辞書アプリ（有料）を使用して意味を調べる。
- 2 辞書アプリ（無料）を使用して意味を調べる。
- 3 検索エンジンで「〇〇とは」「〇〇の意味」と検索して、ヒットした辞書サイトで意味を調べる。
- 4 検索エンジンで「〇〇」（単語のみ）や「〇〇を△△」（句の形）を検索して、その語の使用例を参考にする。
- 5 その他

これらの意味を調べる手段と、調べた結果の平均的な満足度の調査結果を表 3-1 に示す。

表 3-1 外来語の未知語への対処（意識調査）

| 手段 \ 満足度            | 100%          | 80%           | 60%           | 40%         | 20%         | 5%          | 総計             |
|---------------------|---------------|---------------|---------------|-------------|-------------|-------------|----------------|
| 1 有料アプリ             | 0             | 0             | 0             | 0           | 0           | 0           | 0<br>(0.0%)    |
| 2 無料アプリ             | 2             | 4             | 1             | 1           | 0           | 0           | 8<br>(10.3%)   |
| 3 検索エンジン<br>「～とは」検索 | 10            | 33            | 12            | 1           | 0           | 0           | 56<br>(71.8%)  |
| 4 検索エンジン<br>用例検索    | 3             | 6             | 2             | 0           | 0           | 0           | 11<br>(14.1%)  |
| 5 その他               | 0             | 1             | 1             | 0           | 0           | 1           | 3<br>(3.8%)    |
| 総計                  | 15<br>(19.2%) | 44<br>(56.4%) | 16<br>(20.5%) | 2<br>(2.6%) | 0<br>(0.0%) | 1<br>(1.3%) | 78<br>(100.0%) |

スマートフォンで調べる場合に有料アプリを使用する者は皆無であり、「検索エンジンで『～とは』『～の意味』と検索」を行うという回答が全体の71.8%を占める。また全体に満足度が高く、80%以上満足している者が全体の約75%という結果になった。

これはあくまで意識調査であるため、実際の辞書引き行動を把握するために外来語の未知語の意味を調べる課題を出し、45名の回答を得た。このうち「スマートフォン・タブレットで調べる」と回答した39名について、その具体的な調査手段と理解度をまとめて表3-2に示す。手段の内訳は表3-1の意識調査とほぼ一致している。調べた結果の理解度については、以下の5段階の選択肢を用意した。

[十分理解] 「自分でもその語を使えそうなほどに十分理解できた」

[ほぼ理解] 「次は辞書を引かなくても済むほどに理解できた」

[一応理解] 「ひとまず、その場面では理解ができた」

[理解困難] 「あまり理解できなかった」

[理解不能] 「全く理解できなかった」

表3-2 外来語の未知語調査手段と理解度（スマートフォン利用者）

| 理解度<br>手段 | 十分理解          | ほぼ理解         | 一応理解          | 理解困難      | 理解不可        | 無回答          | 総計            |
|-----------|---------------|--------------|---------------|-----------|-------------|--------------|---------------|
| 有料アプリ     | 1             | 0            | 0             | 0         | 0           | 0            | 1<br>(2.6%)   |
| 無料アプリ     | 4             | 0            | 0             | 0         | 0           | 1            | 5<br>(12.8%)  |
| 検索「～とは」   | 5             | 5            | 17            | 0         | 1           | 0            | 28<br>(71.8%) |
| 用例検索      | 1             | 0            | 0             | 0         | 0           | 3            | 4<br>(10.2%)  |
| 無回答       | 0             | 0            | 0             | 0         | 0           | 1            | 1<br>(2.6%)   |
| 集 計       | 11<br>(28.2%) | 5<br>(12.8%) | 17<br>(43.6%) | 0<br>(0%) | 1<br>(2.6%) | 5<br>(12.8%) | 39<br>(100%)  |

有料、無料を問わずアプリ使用者は少数であるが、無回答者を除き全員が「十分理解」と回答している。その自由記述には「説得力のある語源情報」、「わかりやすく詳しい説明」、「(意味の種類別の)用例を参照できること」と、辞書が提供する情報を肯定的にとらえる回答が見られた。

最も回答者が多かったのは「検索エンジンで『～とは』『～の意味』と検索」という回答であり、意識調査と同一の71.8%がこれを選んだ。この28名の理解度を見ると、35.7%が「十分理解」または「ほぼ理解」、60%が「一応理解」となっている。後者についての自由記述には「親しみのない言葉」「今後使うことはなさそう」という理由のほか以下のような意見が見られた。

- ・なんとなくの意味は理解できた。
- ・その場で分からない言葉を調べることで対応が可能である。詳しく知りたければ後日調べればよい。
- ・後になって覚えていない可能性がある。その場で分かれば満足している。
- ・調べたときは理解したが、その言葉を自分で使うとはまた別の問題だと思った。

手っ取り早いためか多数に支持されるこの調べ方は、結果的にはその場しのぎの参照にとどまり、記憶されて当人の語彙として定着しにくい可能性が示唆されよう。とはいえ、「〇〇とは」等で検索した後に選択されるサイトは個々人の設定や場面により異なる。そこで現実の参照場面をイメージした調査を実施した。Googleで「コンセンサス」を検索した結果の画面をプリントに掲載し、1ページ目に表示される9点の検索結果からどれを選ぶか選択させたところ、以下の結果となった。

|           |           |        |
|-----------|-----------|--------|
| Google 翻訳 | (1 番目に表示) | … 42 件 |
| 〈コトバンク〉   | (6 番目に表示) | … 19 件 |
| 意味まとめサイト  | (2 番目に表示) | … 15 件 |

最も多かったのは強調スニペット<sup>7</sup>ブロックに表示される Google 翻訳からの情報である。「意見の一致。合意。」という定義とともに「国民の一を得る」という用例と英訳 (consensus) が表示されるものであるが、これを選んだ理由としては「一番上に表示されているから」32 件 (34.4%) に「辞書サイトなので信憑性のある情報が得られそうだから」21 件 (22.6%) が続く結果となった。

次にそれぞれをクリックした場合に表示される結果を並べて「自分にとってベストであるのはどれか」を尋ねたところ、〈コトバンク〉56 件 (60.2%)、〈Weblio〉30 件 (32.3%) が上位を占め、「意味まとめサイト」5 件 (5.4%)、「用例.jp」2 件 (2.2%) を引き離れた。上位2件の理由として最も多いのは記載内容・情報に関する回答 (35 件) であるが、〈コトバンク〉についてはその詳しさや複数の辞書を搭載していることに重点が置かれるのに対し、〈Weblio〉ではその簡潔さや英語関連情報<sup>8</sup>に触れる意見が見られた。

これらを選ぶ理由を回答の多い順に見ると、「信憑性」と「知名度」とを合わせて21件、「使い慣れている」17件、「教員のすすめ」6件、「トップに表示される」5件となる。「信憑性」や「知名度」と回答した95%は〈コトバンク〉を選んでいる。これに教員の薦めも加えて考えると、検索結果を吟味して参照サイトを絞り込むよりも、使い慣れたサイトや、世間的にあるいは個人的に薦められたサイトを好む傾向が認められるだろう。

これまで外来語の参照場面に限定して見てきたが、意味を知りたい語の属性によって参照方法が異なるのだろうか。これについての質問と回答を以下に示す。

|                         |            |
|-------------------------|------------|
| 特にこだわらず、すべてを同じ方法で調べる。   | 66 (71.0%) |
| 語種によって調べ方を変える。          | 23 (24.7%) |
| 新語かどうか、専門語かどうかで調べ方を変える。 | 0 (0.0%)   |
| 自分との距離、関連性によって調べ方を変える。  | 4 (4.3%)   |

「すべて同じ」が70%強を占める。これは電子辞書から始まった横断検索によって身についた感覚によると推測される。「語種による」という回答は、和語と漢語の区別ではなくそれらと外来語との区別を指すと考えられるが、意味の分からない外来語の多くは新語である可能性が高い。もっとも「新語かどうか」の回答者はゼロであるため、質問方法を改善して再度調査する必要がある。

#### 4. 辞書が提示する情報

以上により学生は分からないことばはスマートフォンで検索すること、結果として表示された用語横断検索サイトで調べることが最も多い傾向が把握された。本章ではそれらに搭載された辞典とその記述内容を比較してみたい。

〈コトバンク〉〈Weblio〉が搭載する国語辞典は以下の通りである（2017年11月現在）。

〈コトバンク〉 『デジタル大辞泉』『大辞林第3版』

〈Weblio〉 『大辞林第3版』『実用日本語表現辞典』

『大辞林第3版』『デジタル大辞泉』はいずれも書籍辞書を母体としている。ただし、前者は2006年の書籍辞書刊行時点の内容であるのに対し、後者は年3回の更新を行う点に相違がある。また、『実用日本語表現辞典』は書籍版の存在しない「実用的で現代的な日本語の表現について解説する辞書・辞典サイト」であり、「一般的な格式ある国語辞典では見出し語として解説されていないことが多い言い回しでも積極的に取り上げ」<sup>9</sup>ている。実際、見出し語に時事用語を含む点や一般の国語辞典よりも長い単位で見出し語を立てる点がその特徴である。

前章で学生たちが辞書サイトについて信憑性や知名度を重視している傾向を見た。両サイトともに上記以外にも百科事典や用語辞典等を多数搭載しているため、語の性質によっては検索結果に国語辞典以外が含まれる。実際にこれらのサイトで検索した場合に表示される情報やその配列順を見てみよう。はじめに、前章で用いた「コンセンサス」に2語を加えた3語の外来語の検索結果を示す。語の選定には、「ベネッセ語彙・読解力検定」のリストや〈Weblio〉の2017年1月～9月のランキングなどを参考にした。○で囲んだ数字は表示順であり、下線部は先に挙げた国語辞典を指している。

##### (1) 「コンセンサス」

〈コトバンク〉 ①『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』 ②『デジタル大辞泉』 ③『世界大百科事典』 ④『大辞林』 ⑤『日本大百科全書（ニッポニカ）』

〈Weblio〉 ①『大辞林』 ②『時事英語のABC』 ③『外来語の言い換え提案』 ④ウィキペディア

##### (2) 「インセンティブ」

〈コトバンク〉 ①『ナビゲート ビジネス基本用語集』 ②『デジタル大辞泉』 ③『人材マネジメント用語集』 ④『ビジネス用語集』 ⑤『人事労務用語辞典』 ⑥『マー

ケティング用語集』 ⑦『流通用語辞典』 ⑧『産学連携キーワード辞典』 ⑨『大辞林』

〈Weblio〉 ①『大辞林』 ②『実用日本語表現辞典』 ③『時事英語のABC』 ④『流通用語辞典』 ⑤『人事労務用語辞典』 ⑥『人材マネジメント用語集』 ⑦『広告用語辞典』 ⑧『産学連携キーワード事典』 ⑨『外来語の言い換え提案』 ⑩『Wikipedia』 ⑪『Wiktionary 日本語版』

(3) 「ダイバーシティ」

〈コトバンク〉 ①『デジタル大辞泉』 ②『朝日新聞掲載「キーワード」』

〈Weblio〉 ①『実用日本語表現辞典』 ②『人事労務用語辞典』 ③『人材マネジメント用語集』 ④『産業・環境キーワード』 ⑤『FA用語辞典』

〈コトバンク〉は参照方法によって異なった結果が得られる点を補足しておこう。上記は検索サイトで「〇〇とは」の検索語でアクセスした結果を示したもののだが、〈コトバンク〉のサイトからアクセスした場合の検索結果は「国語辞典の検索結果」「英和・和英辞典の検索結果」「その他の辞典の検索結果」に分けて表示される<sup>10</sup>。〈Weblio〉は結果を一律に配列するが、上記からも分かるように国語辞典を優先的に配列する傾向にある。

(1)～(3)のうち比較的新しい「ダイバーシティ」の検索結果に『大辞林』がないのは、先述の通り書籍辞書には収録されていないためである。一方、書籍辞書購入者を対象とした会員制「デュアル大辞林」<sup>11</sup>は「書籍未採用」「項目採録・修正日付 2007年11月」の情報とともにこれを見出し語として掲載している。こうした事情は一般には認識されているのだろうか。もしも学生たちが抱く「辞書の信憑性」がオンラインで書籍辞書を引けることに基づくならば、〈Weblio〉の場合は新語ほど例外が多くなることも知っておくべきであろう。こうした点への認識を探るために、これら3点の辞書についての認識について76名にアンケートを実施したところ、必ずしも全員が正しい認識を持っているわけではないことが明らかとなった。結果を簡潔にまとめると以下ようになる。

『大辞林』については書籍辞書の存在も認識されている比率が高かったが、書籍辞書と〈コトバンク〉等で使えるデジタル版との異同についての認識は正確ではなかった。『デジタル大辞泉』については、書籍辞書は出版されていないという認識の者が30%を超えていた。さらに、『実用日本語表現辞典』について「出版されてはおらず、デジタル版しかない」という正解を選択できたのは全体の17.1%であり、実際には存在しない書籍辞書を「使用したことがある」「見たことがある」という回答も合わせて20%に達していた。回答者の90%以上は少なくともどちらかのサイトの使用経験があるが、そこで提供される情報の出典についての意識には個人差が認められた。「常に」意識するのは11.8%、「時々」が31.6%、「たまに」が22%、そして「全くない」は27.6%であった。このことから、サイト自体への信憑性や知名度は意識していても、必ずしもその情報源までは意識していないことが把握された。



検索結果を選ぶ際に知名度や信憑性、また教員からの薦めが影響しているのであれば、具体的な活用方法や注意点を指導することで、このツールをより正しく活用できる可能性もあるのではないだろうか。

## 5. おわりに

本稿では大学生の語彙力増強の一方策を探るべく、辞書に代わって彼らが手にするスマートフォンが持つ可能性を探るための予備調査結果を考察した。

スマートフォンから辞書サイトに直接アクセスすることは稀であるが、検索エンジンを経て辞書サイトを閲覧する傾向があることが把握された。そこでは使い慣れたサイトのほか、辞書の知名度や信憑性が重視され、世間的にあるいは個人的に薦められたサイトを好む傾向が認められた。さらに、そういった調べ方に対する満足度も概ね高いことが把握された。しかしながら、サイト上で提供された情報源までは意識が及んでいないことも明らかとなった。

また、調査手段として最初から辞書アプリを参照する場合と比較すると、検索エンジンから辞書サイトを参照する場合にはその語が本人の語彙として十分に定着する可能性は低いことが示唆された。

もちろん、今回は外来語に限定した調査である点で限界がある。学生たちの大半は語の属性によって参照資料を変えることはないと答えているが、句の形や見出し語を取り出しにくい和語や漢語の場合についても調査が必要である。また、語彙として定着するかどうかは本人たちの予想に過ぎず、これも調査が必要である。実際の場面を模した調査が必要である。

書籍辞書や電子辞書でなくスマートフォンが用いられることのメリットは、いつでも辞書相当情報を携帯でき、手軽に調べられる点にある。デジタル世代であり、書籍辞書を使い慣れていないために意識の及ばない点について多少なりとも指導を加えることで、そのツールを正しく活用するスキルが習得され、それが定着することで間接的に語彙力の向上につながる可能性も期待できるであろう。

## 引用文献

- 大塚みさ (2002) 「学生の辞書利用の実態についての小調査」『歌子』10, 横 1-26.  
 ——— (2006) 「学生の辞書利用の実態についての小調査2」『実践女子短期大学紀要』27, 横 117-128.  
 ——— (2014) 「学生の辞書利用の実態についての小調査4」『歌子』15, 横 1-13.  
 ——— (2016) 「学生の辞書利用の実態についての小調査5」『歌子』17, 横 1-12.  
 荻原廣 (2016) 「大学4年生の日本語の使用語彙は平均約3万語, 理解語彙は平均約4万5千語」『京都語文』23, 276-298.  
 小野博, 馬場真知子, たなかよしこ (2012) 「概説:国語リメディアル教育と大学生の日本語教育」日本リメディアル教育学会監修『大学における学習支援への挑戦—リメディアル教育の現状と課題』ナカニシヤ出版.  
 倉島節尚 (2002) 『辞書と日本語—国語辞典を解剖する』光文社.  
 出版科学研究所 (2017) 『出版指標 年報2017年版』全国出版協会出版科学研究所.  
 総務省 (2017) 「第2節 ICTサービスの利用動向」『情報通信白書平成29年版』<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc262110.html> (最終閲覧日:2017年10月15日)  
 田島ますみ, 佐藤尚子, 橋本美香, 松下達彦, 笹尾洋介 (2016) 「日本人大学生の日本語語彙量測定を試み」『中央学院大学人間・自然論叢』41, 3-20.  
 ビジネス機械・情報システム産業協会 (2017) 2012年会員企業の出荷実績.pdf

[http://www.jbmia.or.jp/statistical\\_data/download.php?id=86](http://www.jbmia.or.jp/statistical_data/download.php?id=86)

2016 年会員企業の出荷実績 .pdf

[http://www.jbmia.or.jp/statistical\\_data/download.php?id=123](http://www.jbmia.or.jp/statistical_data/download.php?id=123)

(最終閲覧日：2017 年 10 月 15 日)

松浦年男 (2015) 「大学初年次の学生に対する日本語語彙力調査の試行」『北星論集 (文)』52 (2), 53-61.

## 注

- 1 大塚 (2002、2006、2014、2016) など
- 2 シェアの大きい小学国語辞典についても教科書改訂に合わせた改訂が一巡した 2016 年は前年を下回る低調な動きを示している (出版科学研究所 2017)
- 3 大塚 (2016)
- 4 倉島 (2002: 96)
- 5 大塚 (2006、2014、2016) による。
- 6 総務省白書によると、この期間の情報通信端末の世帯保有率の推移は以下の通りである。2010 年 (9.7%)、2011 年 (29.3%)、2012 年 (49.5%)、2013 年 (62.6%)、2014 年 (64.2%)、2015 年 (72.0%)
- 7 Google で「〇〇とは」「〇〇意味」など、主に情報収集を目的とした検索を行った際に、検索結果ページの最上部に強調表示する仕組みを指す。
- 8 〈Weblio〉はカテゴリ別検索など複数の方法で全辞典類を検索可能な「Weblio 辞書」のほか、「類語・対義語辞典」「英和・和英辞典」「日中中日辞典」「古語辞典」など辞書の種別にページが設けられている。このうち「英和・和英辞典」は翻訳や語彙テスト、単語帳機能等のほか、拡張性の高い検索が可能となっている。
- 9 <http://www.practical-japanese.com/>
- 10 ここで表示されるのは Yahoo! 辞書 (2013 年 12 月業務提携) のページである。
- 11 <http://daijirin.dual-d.net/>